

筆名は心の師

二十年以上も前、仔細あつて所謂都落ちをし、伊豆の地で志とはかけ離れた生活を悶々として送っていたときのことだ。生涯の師と仰ぐ馬場駿氏が単身、私の勤務先の観光ホテルを訪れた。このとき師は、かつて私が在籍した会社を資本金数十億にまで大きくし、社長付常務取締役として八面六臂の活躍をしていた。秘書も不知のお忍び旅行だという。師は私と妻を夕餉に誘い、その場で泣かんばかりにして私の現状を嘆き憂えた。こんなところで何をしているのだと。

この師との出会いは劇的だった。この会社の横浜支社に応募した際、私は身内の身元保証を得られなかった。三十五六まで夢を追ひ、赤貧洗うが如しのアルバイト生活を送っていた私の、言ってみれば身から出た錆。私は不採用という結果に甘んじるしかなかった。ところが後日、会社が突然再接を申し入れてきた。

当時会社顧問だった師が社長に指示をしたのだ。公立高校任意退学、文部省大検一回全科目合格、通信教

育四年で大学の法科卒、以後法曹を目指して職業的には浪々。師は弾かれた履歴書群の中から私の一枚を拾い上げたのだ。一転私は採用、本来経済力が必要な保証人も、母の「私が産んだ」という証明をもってこれに代えて可となった。調査はしたよと破顔一笑の師。M銀行支店長だったという師は或る日、『僕は東大卒、京大卒いろいろな部下をもったが、君のようなタイプは初めてだ』と肩を叩いてくれた。その言葉の含意は今も不明だが、私は心でその言葉を受け止めた。

心の師が翌朝ホテルを去る際に至言をくれる。「大会で金や地位欲しさに暗闘しているより、疲れ果てた人たちを癒す仕事の方が数段上かもしれない。ゆうべは言い過ぎた。悪かった」。文通はその後数回続いたが、師は難病に罹り終に帰らぬ人となった。私はホテルサービスという仕事から卑屈な想いを取り去った。師に認められた自分を思い出し、そのことを支えにあらゆる屈辱に耐えた。処女出版「小説太田道灌」の筆名は馬場駿。自伝ではないが師に肯定された私の過去が入る連載小説「孤往記」も同じだ。さらにその後も筆名は変えずにきている。